道徳の時間の授業分析と指導のあり方

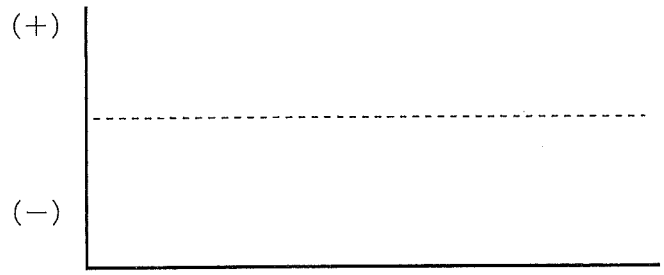
広島大学大学院教育学研究科
鈴木　由美子

１．読み物資料の種類

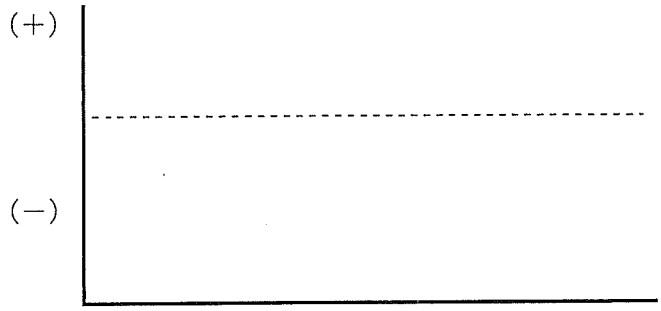
（１）心情資料
（２）心情ジレンマ資料
（３）モラルジレンマ資料

２．読み物資料の分析手法

（１）心情資料・・・　心情曲線による教材分析



（２）心情ジレンマ資料・・・心情曲線＋道徳性の発達指標



【道徳性の発達指標】

「・・・すべき」	「・・・すべきではない」
第１段階　罰回避と従順志向	
・・・におこられるから	・・・をやめさせられるから
第２段階　道具的互恵主義志向（自己本位志向）	
第３段階　他者への同調、あるいは「よいこ」志向	
第４段階　法と社会秩序志向	

（３）モラルジレンマ資料
論点の提示と話し合い（道徳性の発達指標にもとづく意見の予想）

【道徳性の発達指標】

<table>
<tr><td></td><td>「酸素を切るべき」</td><td>「酸素を切るべきではない」</td></tr>
<tr><td rowspan="4">前慣習的水準</td><td colspan="2">第１段階　罰回避と従順志向
行為の物理的な結果が、その人間的な意味や価値とは無関係に、その善悪を決定する。罰を避けて、権威に対して盲目的に服従することに価値を見出す。</td></tr>
<tr><td>例：切らないと酸素がなくなる</td><td>例：切ったら母親におこられる</td></tr>
<tr><td colspan="2">第２段階　道具的互恵主義志向（自己本位志向）
正しい行為というのは、自分自身の要求を場合によっては他人の要求を具体的に満たす行為、つまり報酬を得るための手段（道具）となる行為を指している。結果的には利益を得たり、ほめられたりすることが価値あることと考える。</td></tr>
<tr><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="4">慣習的水準</td><td colspan="2">第３段階　他者への同調、あるいは「よいこ」志向
正しい行為というのは、他人を喜ばせたり、助けたりすることであり、他人から肯定されることである。多数意見、「自然な（ふつうの）」行動というステレオタイプのイメージに対して同調することが価値あることと考える。</td></tr>
<tr><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">第４段階　法と社会秩序志向
義務を果たし、権威を尊重し、社会的秩序を維持するために伝統的な権威による罰を避けるように同調する中で道徳判断がなされる。</td></tr>
<tr><td></td><td></td></tr>
</table>

（３）発問分析の手法
発問＝一問多答　　（cf. 質問＝一問一答）

①限定発問（しぼる問いかけ）
何を思考するのか、それを考えざるをえなくなるように明確に限定する。
例：貫戸さんは酸素を切ると決めたとき、どんな気持ちだったでしょう。
酸素を使っても助からないと確信したとき、貫戸さんは何を考えたでしょう。

②否定発問（ゆさぶる問いかけ）
既得の知識や問題設定が固定化しないように、たえず流動化し否定的にゆさぶることによって、子どもたちの考えの固定化や流動化を防ぐ。
例：貫戸さんは酸素を切るべきではない、との意見が多かったとき
・長い列に並んでわが子の治療を待っているお母さんたちは、どう思うでしょうか。
貫戸さんは酸素を切るべきだ、との意見が多かったとき
・助けて欲しくてわが子を急いで連れてきたお母さんは、どう思うでしょうか。

③関連発問（ひろげる問いかけ）
子どもたちそれぞれの個性的な意見をからませていく。
・自分だったらどうしますか。
・同じようなことがみなさんの生活の中にありませんか。

モラルジレンマ教材１：貫戸朋子さんの葛藤

1993 年、今から 10 年前、貫戸朋子さんは内戦にあえぐスリランカの難民キャンプを訪れ、国境なき医師団の一員として医療活動を行っていました。その時に起こった実際の話です。

国境なき医師団がキャンプをはっている場所には、診察・治療を受けようとする人々が長い列をつくって待っています。貫戸さんが診察をしているとき、緊急の患者がやってきました。その患者は、お母さんに連れられた５歳の子どもで、顔色が悪く、ものすごく苦しそうな息をしていて、目も白目をむいていました。

貫戸さんはこれまで何人もの患者を診てきています。貫戸さんは、この子どもにどのような処置をしても、もう助からないことを確信しました。その時手伝っていた看護師が酸素マスクをその子にあげても、顔色はよくならず、少しも楽になっていません。

貫戸さんは酸素を切ろうかどうか迷いました。なぜならその時、酸素ボンベはその１本しか残っていなかったのです。この１本が最後で、このキャンプ地に、次にいつ酸素ボンベがやってくるかわかりません。もしかしたらこの後、酸素ボンベを必要とする人が来て、その人がこの酸素ボンベによって助かるかもしれません。例えば生まれたばかりの赤ちゃんは、ちょっと酸素をあげると泣き出して元気になることがたくさんあるのです。その時に備えて、貫戸さんは酸素をとっておきたいと考えたのです。しかし、一緒に働いていた看護師が、酸素を切ってはダメというジェスチャーをしていました。貫戸さんは酸素を切ろう切ろうと思いながらも、すぐには切るのをやめて少しの間考えました。

あなたは貫戸さんは切るべきだったと考えますか？それとも、切るべきではなかったと考えますか？また、なぜそのように考えますか？

（「NHK『課外授業ようこそ先輩』国境なき医師団：貫戸朋子、１９９９年」を参考に今永泰生が作成）

教材２：貫戸朋子さんの葛藤ーその後ー

私は、子どもの酸素ボンベを切る決断をしました。この決断が間違っていたとは思いません。でもこのときの胸の痛みは、決して消し去ることができないものです。

このように難民キャンプ地では、過酷な現実があります。不十分な設備や医薬品の下での医療活動は、心残りなことばかりです。それなのに、毎日がとても新鮮な感動で満ちています。ぎりぎりの状況の中で生き抜こうとする、キャンプで出会った人々の明るさに勇気づけられ、子どもたちの屈託なさと素直さに心洗われ、温かいまなざしに感謝し、悲しみの表情に涙しました。なんでもない、ささいなことに感動したり、喜んだりできる人間のすばらしさを味わうこともできました。

１９９４年４月、貫戸さんは定められた６ヶ月の任務を終えてこの地をあとにします。そして、次の任地、戦火の激しいボスニアへと赴くことになります。

（参考資料「中２教科書『マドゥーの地』貫戸朋子」光村書籍　２００２年）

①モラルジレンマ資料を用いるときは、あらかじめ道徳性の発達指標を作成し、子どもの意見がどの段階にあるか、どのような質問をすれば道徳的論点に迫れるか、予想しておく。

②ジレンマが明確になるように、状況説明を行う。

③ジレンマを明確にした上で、自分の立場とそれを選んだ理由についてワークシートに記入する。

④グループで一つの意見、一つの理由にまとめるように討論を行う。

⑤理由が一つにまとまった一つのグループの意見発表をもとにして全体で討論を行う。必要に応じて教師が質問を行う。この質問で論点へと方向づける。

⑥全体討論後、様々な意見を参考にして最終的な意見をワークシートに記入する。

⑦必要に応じて、「開いた」終末にするための助言や資料提示を行う。

道徳性の発達指標（例）

<table>
<tr><th></th><th>「酸素を切るべきだった」</th><th>「酸素を切るべきではなかった」</th></tr>
<tr><td rowspan="5">前慣習的水準</td><td colspan="2">第１段階　罰回避と従順志向
行為の物理的な結果が、その人間的な意味や価値とは無関係に、その善悪を決定する。罰を避けて、権威に対して盲目的に服従することに価値を見出す。</td></tr>
<tr><td>・並んで待っている人に怒られるから。</td><td>・その子の母親に怒られるから。</td></tr>
<tr><td colspan="2">第２段階　道具的互恵主義志向（自己本位志向）
正しい行為というのは、自分自身の要求を場合によっては他人の要求を具体的に満たす行為、つまり報酬を得るための手段（道具）となる行為を指している。結果的には利益を得たり、ほめられたりすることが価値あることと考える。</td></tr>
<tr><td>・並んで待っている人を助けることができるから。</td><td>・目の前の子どもの苦しみを助けることができるから。</td></tr>
<tr><td></td></tr>
<tr><td rowspan="5">慣習的水準</td><td colspan="2">第３段階　他者への同調、あるいは「よいこ」志向
正しい行為というのは、他人を喜ばせたり、助けたりすることであり、他人から肯定されることである。多数意見、「自然な（ふつうの）」行動というステレオタイプのイメージに対して同調することが価値あることと考える。</td></tr>
<tr><td>・助けられない命よりも、多くの助けられる命を助けるのがよいことだから。</td><td>・今、助けを必要としている人を助けるのがよいことだから。</td></tr>
<tr><td colspan="2">第４段階　法と社会秩序志向
義務を果たし、権威を尊重し、社会的秩序を維持するために伝統的な権威による罰を避けるように同調する中で道徳判断がなされる。</td></tr>
<tr><td>・多くの人の命を助けることが、国境なき医師団の医者としての義務だから。</td><td>・最後まで治療に専念することが医者としての義務だから。</td></tr>
<tr><td></td></tr>
</table>

【参考文献・資料】

①吉本均『ドラマとしての授業の成立』明治図書、１９８２年

②瀬川栄志『授業分析の技法』明治図書　１９８４年

③藤田昌士『道徳教育－その歴史・現状・課題－』エイデル研究所　１９８５年

④荒木紀幸編著『道徳教育はこうすればおもしろい－コールバーグ理論とその実践－』北大路書房　１９８８年

⑤荒木紀幸編著『続　道徳教育はこうすればおもしろい－コールバーグ理論の発展とモラルジレンマ授業』北大路書房　１９９７年

⑥『モラルジレンマ授業を展開するための道徳学習資料集　小学校・中学校編』広島県立教育センター　２００１年

⑦鈴木由美子・松田芳明・中尾香子・今永泰生「道徳的価値葛藤を含む教材を用いた道徳授業の開発」（『学校教育実践学研究』第１０巻　広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター　２００４年）

⑧鈴木由美子・宮里智恵他「体験活動を有効に活用する総合単元的道徳授業の開発研究－授業分析による学習効果の検討から－」（『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第３２号　２００４年）